



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	キリスト教における「死の準備教育」の位置
Author(s)	伊藤, 悟
Citation	基督教学, 34, 1-15
Issue Date	1999-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46613
Type	journal article
File Information	34_1-15.pdf



キリスト教における「死の準備教育」の位置

伊 藤 悟

一、死の変化と「死の準備教育」

死ぬ場所の変化とともに、死に対する理解にも変化が見られてきている。厚生省発表の統計によると、一九五一年には病院、診療所で死を迎える人が一・七％、自宅で死を迎える人が八二・五％であったのに対し、一九九六年のデータでは、病院、診療所で死を迎える人が七八・六％、自宅で死を迎える人が一六・七％であり、明らかにここ五〇年足らずの間に、病院で死ぬ者と自宅で死ぬ者の割合が逆転していることがわかる(図表①)。つまり、今日、多くの人は病院で死ぬのである。このことは、死因の七割以上が病死であるからに他ならないが(図表②)、そうかと言って医療技術の進歩や病院病床数の増加だけによるものではなく、家族形態の変化(核家族化)や社会保障制度の確立、一般市民の医療知識(意識)の向上など、様々な社会的複合要因が考えられる。

しかし、病院死の増加によって、われわれが他者の死に直面することが少なくなったのも事実である。R・C・ミラーは、「今日の文化はわたしたちを死から保護している」と述べている⁽¹⁾。突発的なことが起こらない限り、死体は人目に付かないようにすぐに覆われてしまふし、たとえ自宅で死んだとしてもすぐ検死のために病院に運ばれていく。

図表① 全国場所別死亡率の年次推移

(厚生省)

	病院	診療所	老人保健施設	助産所	老人ホーム	自宅	その他
1951(S26)年	9.1%	2.6%	—	0.0%	—	82.5%	5.9%
1955(S30)年	12.3%	3.1%	—	0.1%	—	76.9%	7.7%
1965(S40)年	24.6%	3.9%	—	0.1%	—	65.0%	6.4%
1975(S50)年	41.8%	4.9%	—	0.0%	—	47.7%	5.6%
1985(S60)年	63.0%	4.3%	—	0.0%	—	28.3%	4.4%
1990(H2)年	71.6%	3.4%	0.0%	0.0%	—	21.7%	3.3%
1993(H5)年	73.7%	3.2%	0.1%	0.0%	—	19.8%	3.2%
1994(H6)年	73.6%	3.1%	0.2%	0.0%	—	19.9%	3.2%
1995(H7)年	74.1%	3.0%	0.2%	0.0%	1.5%	18.3%	2.9%
1996(H8)年	75.7%	2.9%	0.3%	0.0%	1.6%	16.7%	2.8%
北海道のみ(H8)	83.9%	3.6%	0.1%	0.0%	1.3%	8.4%	2.7%

* 1994(H6)年までは老人ホームでの死亡は自宅又はその他に含まれる。

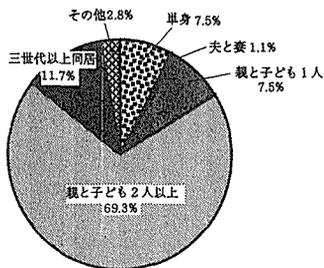
図表② 全国死因別死亡率(第10位まで、1996年)

(厚生省)

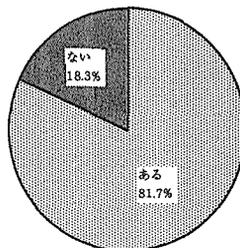
総 計		男 性		女 性	
①悪性新生物	30.3%	①悪性新生物	33.7%	①悪性新生物	26.1%
②脳血管疾患	15.7%	②心疾患	14.1%	②脳血管疾患	18.1%
③心疾患	15.4%	③脳血管疾患	13.6%	③心疾患	17.0%
④肺炎	7.9%	④肺炎	7.9%	④肺炎	8.0%
⑤不慮の事故	4.4%	⑤不慮の事故	5.2%	⑤老 衰	3.6%
⑥自殺	2.5%	⑥自殺	3.0%	⑥不慮の事故	3.4%
⑦老 衰	2.3%	⑦肝疾患	2.3%	⑦腎不全	2.1%
⑧肝疾患	1.8%	⑧慢性閉塞性肺疾患	1.7%	⑧自殺	1.8%
⑨腎不全	1.8%	⑨腎不全	1.5%	⑨糖尿病	1.6%
⑩糖尿病	1.4%	⑩糖尿病	1.3%	⑩肝疾患	1.3%

メディアを通じて死に触れることはあっても、死を直接目にすることは少ないのである。

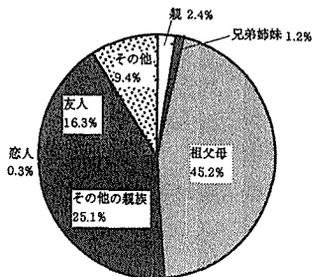
筆者が大学生四九八名を対象に行ったアンケート調査では、八割以上の学生が単身または二世代までの家族構成(核家族)のなかで生活しており、同居者の死に遭遇したところのある学生は極端に少なくなっている(図表③、⑤)。さらに死者の身体に触れたことのある者となると、四五・九%と全体の半数に満たない(図表⑥)。まさに死は日常生活から隔離されているのである。また、われわれは意識のなかでも死を隔離する傾向をもって、わが国ではとくにその傾向が強く、アンケート結果も圧倒的に死について暗いイメージをもっている者が多いことを示している(図表⑦、⑧)。死を不吉なものとして捉えたり、あたかも自分には死



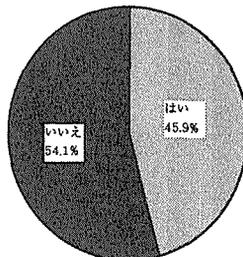
図表③ 現在の家族構成



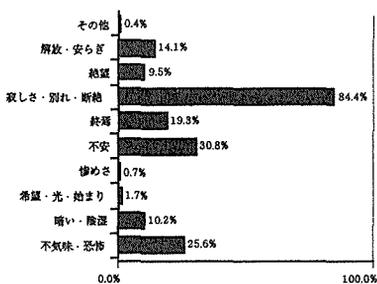
図表④ 身近な人が死んだという経験



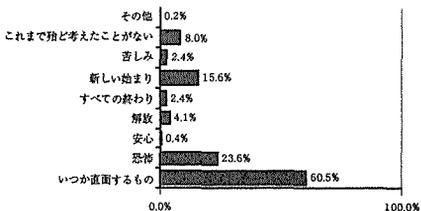
図表⑤ それは誰の死か



図表⑥ 死人の顔や体に触れた経験



図表⑦ 「人の死」に対するイメージ



図表⑧ 「自分の死」の捉えかた

が訪れないかのごとく振る舞い、現代社会において死は常にタブーな領域へと追いやられているのである。

だが近年、次第に死を直視することの必要性、死への準備の必要性、死について学ぶことの必要性が叫ばれるようになり、それらを「死の準備教育 (Death education)」と呼ぶことも社会的に認知されるようになってきた。その契機となったのは言うまでもなくシカゴ大学のキュブラー・ロスの研究である。⁽²⁾最近ではわが国でも、医療関係者や宗教関係者による死に関する書物が急速に増えつつあり、各地で研究会が開催されたり、死を生に続くものとして積極的に捉え学んでいこうとする姿勢がみられる。

しかし、「死の準備教育」の内容や実態は、まだ極めて乏しく、学校教育の公式カリキュラムのなかで死の問題を取り上げることなど皆無に等しいし、むしろ現在の教育においては、学校においても家庭においても、死を直視しないようにとあえて子どもたちの目を覆うことが美德とされている。子どもたちは通常、葬儀に参列することも少なく、先のミラーは、「性教育については、かなり解放的に十分な役割を果たす両親も、死については依然としてヴィクトリア朝風の上品さで充ちている」と述べ、タブー視されている死の現実を指摘している。また、「死の教育を、死が予期されるまで延ばすのは余りに遅い。ちょうどそれは性教育を二人の新婚の床まで延ばすようなものである」とも述べて、人生のあらゆる場面での「死の準備教育」の必要性を訴えている。

そのなかでキリスト教会は「死の準備教育」にいち早く着手してきた。着手してきたというよりも、キリスト教信仰そのものが「死の準備教育」とも言える。キリスト教信仰は、イエスの十字架の死と復活に基づく信仰形態であり、イエスの死と復活を語り継ぎ、それに与かることによってその信仰が継承されてきたからである。初代教会の人々は迫害に瀕するなか、自らの死に信仰的意味を与えようとしたし、彼らが家族への永遠の命の付与を求めたのは、まさに死の準備そのものであった。⁽³⁾キリスト教信仰はその始まりからイエスの死を語り伝え、またイエスの死に自らの死を重ねた数多くの殉教者たちの死を物語ってきた。ここに、キリスト教の「死の準備教育」の独自性がある。

但し、死の環境や意識が変化するなかで、キリスト教は今日、これまでなかったほどに人の死に関して大きなチャレンジを受けている。「宗教的信仰の衰退が、人間の生の尊厳に対する信念を衰えさせている」との批判もあるなか、人の死に関してキリスト教が与えなければならぬ影響がことさら大きくなっているのである。

「死の準備教育」を体系的に展開しようとする場合、これが教育論である以上、必然的に具体的方法論が問題にされる。しかし方法論は常に原理論からの帰結であって、キリスト教が「死の準備教育」に関わる場合、「死の準備教育」も当然ある種の原理すなわちある種の神学を前提として立てられていかねばならない。ここでは、プロテスタントの「死の準備教育」を教会教育のなかに位置づけながら、(一)宗教教育(宗教的情操教育)型、(二)キリスト教教育型、(三)キリスト教宗教教育型という三つの類型に分けて、キリスト教の行う「死の準備教育」の原理について考察していきたい。

二、「死の準備教育」——宗教教育(宗教的情操教育)型の場合

一九〇〇年代の初頭から一九三〇年代にいたるまで、教会教育の主流は自由主義神学の受容であったことは周知の通りである。また、教会教育は自由主義神学とともに、アメリカの社会的福音、そしてジョン・デューイに代表される進歩主義的教育理論の影響を大きく受けてきた。そこでは個人の経験が重視され、個々の人間の無限の人格的価値を向上させることにより神の社会的王国の建設(社会構築)をしていくことが強調されていた。自由主義神学においては、人間は神の子(被造物)として捉えられている。したがって神の被造物として、人間は本質的に善なるものと理解され、「それ故にその人間の内奥の本質をなす人格は神と似た性質を持っている。それ故に人格は無限の可能性を持つものだといえる」のである。これは、つまり人間は神と等しいものを分有することを意味しており、のちに弁証法神学によってこの自然神学・経験主義神学が批判を受けることになる。

こうした人間理解のもとでは、おのずと神学は他の諸学と相対化され、心理学や発達心理学、社会学、環境的な事柄、あるいはそれらを含んだ世俗的なものの影響を強く受けるのを回避することができない。イエスは最高のモラル規範（賢人、英雄）として相対化され、教育面では当然のごとく道徳教育や宗教的情操教育が前面に出されることになる。キリストの御旗のもとに「よき国家」「よき市民」を育成しようというのである。デューイの同僚コウ (George Albert Coe) も、「宗教教育過程の中心事実は、学習者の社会的交渉によって発達するキリスト者の経験である」と述べて、経験重視型の市民教育を提唱している。この時代の教会の教育活動は、徹底した社会モラルを教え込むことにより社会構造全体に影響を与えていくことを目指していたのである。ここでは、こうした教会教育を「宗教教育（宗教的情操教育）型」と呼ぶことにする。

自由主義神学に基づく教育の在り方は、決して過去のものではなく、今なおそうした神学に傾倒する教会は少なくない。教会を自己実現の場、社会変革の拠点、解放の根源としていこうとする。そこでは他の諸学に対しても開放的であるが、開放的であるばかりにどうしても神学が相対化され、イエスも賢人化される傾向をもつ。教会は、よき市民教育のための場なのである。

「宗教教育型」教育において「死の準備教育」を扱っていく場合は、したがって諸学の一つとして取り扱われることになる。つまり、今日その必要性が叫ばれているところの「死の準備教育」いわゆる世俗社会の「死の準備教育」の手法を受け容れ、宗教教育のプログラムもしくはカリキュラムの一つとして位置づけていくことを可能にしようとする。その内容は心理的・精神的側面が色濃く、自由主義神学においては人格の神的性格や人間の善性が柱にされていることから、「死の準備教育」の目的も個人の自己実現や人格の完成を目指すことになる。すなわち一人一人が人間としての生涯を全うして人間らしい死を迎えるとはどういうことであるか、死への恐れを克服して死に立ち向かっていくとはどういうことなのか、さらに死を宗教的次元でとらえ安らかな最期を迎えるためには何が必要であるかが課題

とされていく。

「アプローチの方法も、心理的・精神的アプローチが中心となり、死という恐れと不安からの解放を目指して、文学が用いられたり、聖書の言葉が用いられたり、人々や自然との触れ合いを重視したりする。批判的に述べるとするならば、あえてキリスト教でなくてもよい教育であり、キリスト教を用いた人道主義教育、また他の宗教や教会以外の諸機関でも代替可能なプログラムでもある。ここでは、イエスの死も高次元モラルにおける模範的死としてとらえ、義のために自己を犠牲にしたり、他者のために命を捧げることが美德とされる。これは死による聖化でもあるが、一方で、ともすると「死の序列化」を促進する危険性をもっている。今日の脳死、尊厳死、臓器移植などの問題も、この「死の序列化」と大きく関わっている。それぞれに固有の死でありながらも、実際には優れた死から劣った死まで、死に方や死ぬ間際の生き方によって死の評価がされるのである。

「宗教教育型」教育において、死は、個人の生の終焉における人格の完成であり、人々にはよりモラルの高い死が要求されていく。そのためにどんな事前準備が必要なのが「死の準備教育」の果たすべき役割なのである。

三、「死の準備教育」——キリスト教教育型の場合

次に「キリスト教教育型」を見てみたい。「宗教教育型」に対して、その後の教会教育原理の基盤となったのはネオ・オースドキシシー（新正統主義神学）であった。ネオ・オースドキシシーは、それまでの自由主義神学の影響のもとにあった宗教教育論に鋭い批判を浴びせ、神学と教育の遊離や教育における神学的混乱の問題を指摘し、結果としてそれまでの「宗教教育」を否定した。人格形成や社会構築ではなしに、神の啓示を先行させることによって啓示そのものを教会教育の内容として捉えたのである。「教育とは欠けを暴露することである」とはバルトの言葉であり、それを補完するのは人間の力ではない。ちなみに、バルトにとっては教会教育は聖書を学ぶこと、すなわち聖書本文の研究

(Text-Arbeit) であつたといふ⁽⁹⁾。その中心は「啓示としてのイエス・キリスト」であり、すべての人間の営みをイエスという一点から捉え直したのであつた。いわゆるキリスト論を中心にするところの神学的人間論である。

新正統主義神学の台頭によつて、教会教育は明確に神学的に基礎づけられることになつた。以来、欧米においても、わが国においても、それまでの「宗教教育 (religious education)」や「宗教的情操教育」と區別して「キリスト教教育 (Christian education)」と称されるようになった。日本の多くの教会で「日曜学校」という呼称が「教会学校」と改められたのもこの影響であり、「教会がその教育的機能を果たすために選びとつたもの⁽¹⁰⁾」であつた。

「キリスト教教育型」においては、人間的な業としての心理学、教育学、あるいは精神療法などについて、その価値を否定することはないが、それらの限界を認めて最終的な手立てとはしない。むしろ聖霊の働きが全面的に強調され、信仰によつてそれらがまっとうされて罪人としての人間がキリストにとらえられていくのである。トウルナイゼンは次のように述べる。「いっさいの心理学的—教育学的前提が欠けていればいるほど、聖霊という条件は、いっさいわれわれの話し合いの、唯一にして、勝利に満ちた条件として妥当するに至るのである⁽¹¹⁾」と。したがつて「キリスト教教育型」は、こつした神の啓示としての「キリスト」と、キリストを証しする「聖書」、キリストと聖書とに立つ「教会」、そしてそれを包み込む「聖霊」に教育の原理を求めていこうとする。

ここでは、人間は、罪に陥つた存在であり、キリストにおいて審かれ、救い出され、新たに生かされるものとして理解される。個人の魂の救い(個人の回心)を重視することから、「死の準備教育」においてもキリストへの信仰的結合が優先され、死そのものへの不安や苦しみも、キリストの十字架における苦悩と重ね合わせたり同一視したりすることによつて回避しようとする。キリストの死は、神の独り子の死であり、唯一絶対なる死である。このキリストの死をいかに自らの生と死に適用させて内的変革を引き起こしていくかが、「死の準備教育」の取り組むべき課題である。

キリスト教教育型の「死の準備教育」は、人生のプロセスとしての死というより、神の栄光をあらわすための、キ

リスト者としてのよりよい死を目指した「死の準備教育」が強調されていくことになろう。宗教教育型のそれに比べて、キリスト教の死の準備教育という側面が強く、イエスの死から自らの死を捉え直していくというキリスト教の独自性がより発揮されたかたちの「死の準備教育」である。したがって、死についてのトータルな学びでありつつも、とりわけキリスト教の信仰者のためのプログラムである。いわばパウロの述べるところの「生きると思えば主のため

に生き、死ぬと思えば主のために死ぬ」(ローマ一四・八)ための準備である。その死の根拠はあくまでもキリストの十字架の死にあり、「その死の姿にあやかりながら」(フィリピ三・一〇)死までのときを生きていこうとする。

展開方法としては、解釈中心のアプローチとなってくる。教理教育や聖書研究がその柱となり、キリストの死(神の死)を現代のわれわれがどのように解釈し、贖罪の現実をどう捉えるかという神学的課題に对应していくことが「死の準備教育」のポイントになってこよう。そのために靈性を高め、敬虔なる生活を模索し、死や現実の生に対して謙虚な生き方を求めることが、キリスト者としてのよりよい生き方であり、生における美德となるのである。靈的・信仰の高揚によって、また終わりの日の復活を確信するという仕方によって死を克服しようとする信仰的挑戦である。

但し、この場合、「死の準備教育」だけを傑出させてカリキュラム化させるには困難が伴う。それは、教会独自のプログラムであるだけでなく、教会のミニストリー全体がキリストの死と復活を通しての「死の準備教育」そのものだからである。また、個人の魂の救済や個別の信仰の成長を重視しながらも、個々の死の状況には必ずしも的確に対応しきれず、人が死に対してもっている様々な感覚、心理状況、精神的状態をときには蔑ろにして抽象的な死の理解にとどまる傾向がある。

四、「死の準備教育」——キリスト教宗教教育型の場合

「キリスト教宗教教育 (Christian Religious Education)」という用語は、一九八〇年代以降、宗教教育とキリスト

教教育の複合語として、ボストン大学のトーマス・グルームらによって意識的に用いられるようになった。¹² 自由主義神学に基づく「宗教教育」と、ネオ・オーソドキシシーに基づく「キリスト教教育」の中道もしくは第三の道をいき、宗教教育のような自然神学的発想はせずにキリスト論を中心とするが、心理学や教育学など他の諸学、また他宗教などを排除はせずに、積極的に対話の相手としていこうとする。また、キリスト教の独自性を明確に主張しつつ、一人一人の人間が信仰の物語を伝達することによって整えられ、キリスト教の独自の共同体の形成をはかろうとする教会の教育的業と考えられている。

このキリスト教宗教教育は、今日、教会教育理解の主流になり始めているが、ここで重視されているのはキリスト教の「物語性」（物語の神学）である。キリスト教宗教教育では、キリスト教の福音や信仰共同体の在り方が、物語として伝達され継承されていくことに関心を示している。人間は神の大きな物語の一部分を形成していく役割を担い、すべての人間が物語を形成する貴重な「神の器」として理解される。そして教会という信仰共同体を、物語を継承する場として捉えている。「わたしの」物語は、教会の働きをとおしてイエス・キリストを中心とする福音の物語に取り込まれていき、この物語における教育活動は、ときにカリキュラムを必要とするが、ときにカリキュラムを必要とせずに（潜在カリキュラム）信仰共同体でのあらゆる生活様式を通じて伝えられていく。

教会の在り方としても、単に個人的信仰者の集合体というよりも、キリストの体としての身体性を持ち、自由主義がリベラルと呼ばれ、ネオ・オーソドキシシーが保守派と呼ばれるなら、それらに代わる新しいラディカルな立場として展開するのである。

ここでは、イエス・キリストの福音を現代的に解釈しなおすのではなく、現代をイエス・キリストの福音に基礎づけることを強調する。われわれの現実には神を向かい合わせるのではなく、礼拝を中心としながら神の現実になわれわれを向かわせるのである。教会はまた、神の癒しと恵みの礎であり神の国のアナロギアであって、神の約束の成就すな

わち終末を先取りするものとして理解されていく。教会においてわれわれは終末の希望と神の国の完成を見、キリストを信仰共同体の頭、キリストの十字架を神の終末の始まりとしてとらえていくのである。ここでは、生きた共同体を形成することが教会や教会教育の大きな使命である。

こうした教会理解のもとでは、「死の準備教育」も必然的に物語的性格を帯びることになる。生も死も神の奥義としてとらえられ、一人の死は固有のかけがえない死でありつつも、神の物語にとり込まれる一つの死であり、あらゆる死がどのようにキリストの十字架を中心とした物語と関わっていくのかが重大な死の捉え方となってくる。聖書や教会史のなかでは数多くの死が取り上げられており、その一つ一つが物語であって、単なる一過性の事実としてではなく、信仰上の出来事として取り上げられている。しかし、あくまでもその中心はイエス・キリストの十字架の死と復活の物語であり、これまでの様々な知識や経験と共に自己の生と死の物語をどのように神の物語に引き合わせて重大な関心事となる。つまり、死も含めて、われわれの信仰生活とは「走っている列車に飛び乗るようなもの」¹³なのである。

ウェスターホフによれば、およそ祭儀生活のない共同体は存在しない¹⁴。共同体は祭儀生活によって自己理解と生き方を維持し伝承するのである。キリスト教信仰共同体においては、その祭儀は、礼拝とその核心であるサクラメントに他ならない。したがって、信仰共同体の視点から「死の準備教育」を展開する場合、そのアプローチの仕方は、教会論そしてサクラメントが中心におかれ、キリスト礼拝を目指し、そこに依拠した死の準備が求められることになる。信仰共同体の物語の中心を担ってきたのは、政治でも職制でもなく、明らかに礼拝とサクラメントというキリスト教の祭儀だったからである。また、このことから終末論的共同体としての終末論的なアプローチも期待されてくる。「キリスト教宗教育型」では、さらに、今日における死の環境的・意識的变化に対しても敏感である必要がある。諸学の研究成果を尊重しながら死そのものについて検証し、それらを相対化させながら、教会独自の「死の準備教育」

	宗教教育型	キリスト教教育型	キリスト教宗教育型
教会形態	行動主義型 世俗主義的 (文化受容的) リベラル	回心中心型 個人主義的 (内的変革) 排他的、保守的	告白共同体 キリストのからだ ラディカル
信仰形態	社会的信仰	個人的信仰	共同体信仰
教会教育が目指すもの	よりよい国民の育成、人格形成 現代をより高尚なものへ 道徳としての教会教育 (情操教育) 社会変革	よりよいキリスト者の育成 キリストの現代化 個人の魂の救い(個人の回心)	キリスト礼拝 信仰共同体の形成 現代をキリストへ
イエス理解	最高のモラル規範として	神の啓示としてのキリスト	共同体の頭としてのキリスト
イエスの十字架の死	模範死・高モラル死	神の独り子の死	終末のはじまり
サクラメント	共に生きることのしるし 共同体のしるし	キリストの苦しみに与かる聖なる恵みとして	神の現実に向かい合うこと 恵み、癒し、終末と希望 最高の死の準備教育
人間理解	神の被造物として、人間は本質的に善なる者	キリストのとりにしと神の救済を必要とする罪人	応答する者、神の器、物語の継承者
「死の準備教育」の位置	世俗プログラムの受容 終わりを意識して生を生きる みんなに親しまれて死を迎える	教会独自のプログラム 信仰者のためのプログラム キリストの苦悩と自らの苦悩とを重ねる	救済プロセスとしてのプログラム 生も死も神の奥義として 神の物語の一つとしての死 教会的決断として
「死の準備教育」が目指すもの・目的・目標	自己実現・人格の完成のために 人間らしい死(死に打ち勝ち、死を受容して死を迎える) 死を宗教的次元でも理解する完成としての死	神の栄光のため キリストとの信仰的結合 キリストの死にあやかりながら死までを生き抜く 終わりの日の復活	生きた共同体形成のために あらゆる死がどのようにキリストの十字架を中心とした物語と関わっていくか 神の国ヴィジョン、キリスト礼拝
「死の準備教育」の方法	心理的・精神的アプローチ 文学的アプローチ 宗教学的アプローチ 解放中心のアプローチ	教理教育・聖書研究 霊的・信仰的アプローチ 神学的アプローチ 解釈中心のアプローチ	教会論的アプローチ 礼拝中心のアプローチ 終末論的アプローチ 物語の継承
語学との関係	完全受容の傾向 自己相対化の傾向	あまり重視することはない 排除することもある 自己絶対化の傾向	尊重しつつ独自性を明確に 相対的絶対主義

を主張していくという相対的絶対主義の立場を鮮明にしていく必要がある。われわれは、共同体の生活、共同体の祭儀を通して、多くの信仰者の死の物語に出会い、キリストの物語に依拠する生き方（終末論的生き方）を身につけていくなかで信仰者としての死生観、そして「死の準備教育」を構築し展開していくのである。

五、まとめ

教会教育のなかで「死の準備教育」を体系化しようとする場合、その教会のもつ人間観そして教会観に寄って立つかでプログラム自体が根本的に変化することを教会教育の三つの類型をもとに概観してきた。枠内にすべての状況を収めることができないという類型化の限界下にありながらも、「キリスト教教育の態度決定はその人の教会への告白のかたち」¹⁵である。

「死の準備教育」は、そもそもグリーフ・ワークを行うためのものではなく、「死にゆく人々」の死の受容、恐れからの解放を目指そうとするもので、人間が人間として死ぬことを助成することである。かくして、死をいかに受容するかが「死の準備教育」にとってはなくてはならない要素であって、「死の準備教育」の前提には、死の本質論が存していることになる。キリスト教の場合、死の本質論は、教会の保持する人間観によって左右され、その根拠はキリスト論にある。イエス・キリストの存在と彼の死と復活の受け入れ方によって「死の準備教育」のかたちが変容するのである。

今日の死をとりまく状況や倫理観の変化に伴い、われわれは、あらためてキリスト論を中心とするところの教会論、人間論の確立を目指す必要に迫られている。いまだカリキュラムや具体的内容に乏しい「死の準備教育」であるが、キリスト教は、ヒューマニズム的関心だけから「死の準備教育」を展開しようとする世俗的試みを超越することが急務でもある。しかし概観してきた三つの類型は、いずれも完全なかたちではない。それぞれの理解に特徴があり、そ

れらが生起してきた歴史的背景もある。キリスト者の美德とは何かを問いつつ、キリスト教が「死の準備教育」を取り上げることの意味を改めて再考すべきなのだろう。

注

- (1) ランドルフ・C・ミラー『死の教育』鍋倉勲訳、ヨルダン社、一九九五年、二〇頁。(原著 Randolph Crump Miller, Live until You Die, A Pilgrim Press Book from United Church Press, Philadelphia, 1973)
- (2) Elisabeth Kubler-Ross, *On Death and Dying*, New York: Macmillan Pub, 1969 (邦訳『死ぬ瞬間』川口正吉訳、読売新聞社、一九七五年)をはじめとするE・キューブラー・ロス「死ぬ瞬間」シリーズ。『続・死ぬ瞬間』『新・死ぬ瞬間』『死ぬ瞬間の対話』ほか(邦訳はいずれも読売新聞社)。
- (3) 前掲注(1)書、五三頁。
- (4) 前掲注(1)書、九五頁。
- (5) 幼児洗礼に関する最も古い記録は三世紀はじめのものであり、幼児洗礼は、キリスト教が迫害を受けるなかで、信仰者が自分の子どもたちも神の救いのうちに入れられたいという強い願いから教会が執行するようになったと言われる。
- (6) *New York Times*, May 31, 1970, p. 14E. (この記事に引くのは Betty R. Green and Donald P. Irish, eds., *Death Education*, Cambridge, Mass.: Shenkman, 1971, p. 63. も引用)
- (7) 小浦井滋『ソルトと宗教教育』ヨルダン社、一九九六年、一二五頁。
- (8) George Albert Coe, *A Social Theory of Religious Education*, New York: Arno Press, 1969, rpt., (Charles Scribner's Sons, 1917, 1st ed.) p. 80. (『社会的宗教教育原論』近藤義一郎訳、保全社、一九三二年、七九頁)
- (9) 前掲注(7)書、二一八頁。
- (10) 高崎毅『基督教教育』新教出版社、一九五二年、一八二頁。
- (11) トウルナイゼン『牧会学』加藤常昭訳、日本基督教団出版局、一九六一年、二二三頁。
- (12) Thomas H. Groom, *Christian Religious Education*, Harper & Row, 1985.

- (13) Stanley Hourwas and William H. Willimon, *Resident Aliens*, Albington Press, 1987, p. 52-53. (『旅する神の民』東方教
信、伊藤悟訳、教文館、一九九九年、六七頁)
- (14) John H. Westerhoff, "Toward a Definition of Christian Education," in *A Colloquy on Christian Education*, ed. by John
H. Westerhoff, New York: Pilgrim Press, 1972, p. 63.
- (15) 前掲注⑩書、一二頁。